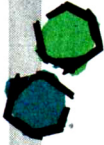


ひろしま



歴史回廊

第12部・近世の自然と暮らし ③

猪や鹿による農作物被害の背景には、人間活動の活発化がありそうだ。森林伐採や畑開墾の進展が、彼らとの緩衝地帯をなくし、衝突を招いた面もあったのではないか。

江戸時代の半ば正徳五(一七二五)年から明治十五(一八八二)年の間に、旧広島藩領の人口は約五十六万からほぼ一・八倍に増加している。先行した近畿地方を追うような姿である。

■林野が畑や棚田へ

しかし、広島藩内でも均等に増加したわけではない。郡別(天領など他領を含む郡は割愛)では図のように沿岸部に集中し、さらに詳しく調べると島々の増加が著しい。ま

開墾や産業発展要因

人口増加

ず思い浮かぶのはサツマイモの導入と段々畑の開墾という光景である。

広島藩領でも江戸時代の前半に大規模な干拓と新田開発が行われた。しかし後半にはむしろ村人による日常的な開墾が進み、沿岸部や島々では、わずかな林野が段々畑や棚田に姿を変えていった。

この地域では、段々畑をコツコツ開いて芋や麦を作る一方、廻船や造船業、船乗りや各地への出稼ぎ、鰯網などの漁業、綿作の労働や木綿織りの内職、都市や塩田に薪を供給する山仕事など、全国的な海運と諸産業の展開に直結した新たな稼ぎの機会をとらえ、人口を増している。むしろ過剰気味といってもよい。

■倉橋島では4倍に

例えば前回紹介の倉橋島(村)では、右の期間に人口が三千人前後からほぼ四倍に、耕地も畑を中心に六倍に増えている。そして文化十一(一八一四)年の村々の調査によると、あれほど村人を悩ました猪が、すでに追放されたのか見えなくなっている。

一方、同じ島でも宮島では鹿は神の使いとされ、猿とともに町の暮らしに溶け込んでいた。ここでは藩によって耕作が制限され、年貢の負担もない。多くの参詣人を迎え、娯楽も提供するなど、町場としての暮らしぶりがあり、そこにはまた異なる動物との付き合い方があったようである。

(広島大教授・佐竹昭)

土曜日に掲載します

1715-1882年の旧広島藩領の郡別人口増加率

